



ドナルド・トランプ

メディアが生み出した

「白人ブルーカラー層のヒーロー」

まえしま かずひろ
前嶋 和弘

(上智大学総合グローバル学部教授)

これまでの2016年大統領選挙予備選を振り返ると、何といっても不動産王・ドナルド・トランプ氏の台頭に尽きる。トランプ氏が連発する予想外の暴言にアメリカだけでなく、世界が大きく振り回されてきた。この暴言が白人ブルーカラー層の屈折した感情に訴え、トランプ氏の人気は

高くなっていった。さらに、トランプ氏を面白おかしく伝えるメディアにも、トランプ現象を増幅させた責任がある。

白人ブルーカラー層の屈折した苛立ち

トランプ氏台頭の理由については、様々な解釈がある。

その中でも最も重要だと筆者が思うのが、白人ブルーカラー層の不満や不安をトランプ氏が見事に代弁していることであろう。

アメリカの中の格差が次第に広がっていく中、下層からはい上がれない人々が白人ブルーカラー層である。白人ブルーカラー層が抱えているのは、置き去りになってしまったという単なる経済的な不満感だけでない。1980年代末から急増しているヒスパニック系やアジア系を中心とする移民の流入で、周りにいる肌の色が異なる人々が、自分たちよりもどんどんいち早く社会の階段を上がっていく。「白人の俺たちの方が本来は上の社会階層にいたはずなのに」という屈折した苛立ちを、白人ブルーカラー層は共有している。

筆者は本年に入って何度か渡米し、トランプ支持者の話をきいた。支持者の中には、比較的裕福そうにみえる人もいなかったわけではないが、多くが服装を見ても生活に余裕がなさそうだった。職業を聞くと、自営業や工場労働者などのブルーカラーがやはり多かった。参加者の多くに共通しているのは、「これまで政治には関心が全くなかったが、トランプは別」「トランプの発言を聞くと本当にスカッとする」といったトランプ氏への熱烈な支持とともに、「ワシントンの奴らは敵だ」という強い怒りの感情だった。

「ムスリム（イスラム教徒） 入国禁止」「イスラム国への

じゅうたん爆撃」「同盟関係の見直し」「米墨国境に万里の長城建設」「TPP（環太平洋パートナーシップ協定）は中国の陰謀だ」などのトランプ氏が連発してきた数々の問題発言は、白人ブルーカラー層にとっては極端な暴言ではなく、むしろ、心から賛同できる具体的な政策に近いかもしれない。

イスラム国の台頭から、反米テロにアメリカ国民はおびえるようになった。ただ、世界情勢に疎い白人ブルーカラー層にとって、海外のムスリムはあまりにも遠い存在である。イスラム教徒は、アメリカの人口の中の1%に満たず、しかもそのうち4分の1は、解放運動の一環でムスリムに改宗したアフリカ系である。都市部にモスクが集中する中、多くの白人ブルーカラー層にとってはムスリムとの接点はほとんどない。「反米テロを起こすようなとんでもない奴らは一気に皆殺しにしろ。そもそも、テロリストの疑いがあるようなやつらは、状況が改善するまで入国させるな」というのが、白人ブルーカラー層の本音かもしれない。

白人ブルーカラー層の多くは、さらに次のように思っているはずである。「税金で欧州や日本、韓国などの同盟国をアメリカが防衛するお金があれば、自分たちの生活を改善してほしい」「俺たちの雇用を奪うメキシコからの移民は絶対入れるな」「中国はこれまでも自分たちの仕事を奪ってきた。TPPというのができるようでそれには中国はい



前嶋和弘（まえしま・かずひろ）1965年静岡県生まれ。上智大学総合グローバル学部教授。上智大学外国語学部英語学科卒、ジョージタウン大学大学院政治学部修士課程修了（MA）、メリーランド大学大学院政治学部博士課程修了（Ph. D.）。専門は現代アメリカ政治。主な著作は『アメリカ政治とメディア：政治のインフラから政治の主役になるマスメディア』（北樹出版、2011年）、『オバマ後のアメリカ政治：2012年大統領選挙と分断された政治の行方』（共編著、東信堂、2014年）など。

まのところ、入っていないらしいが、中国はずいぶん甘い。中国は入り込み、甘い汁を吸うだろう。TPPは中国の罠だ。どれもしかし

り考えれば、費用や人道的な問題、国益などから現実的に実現が難しいものばかりだが、このように考えている層にとっては、トランプ氏以上の候補は存在しない。議会の権限も強く、大統領の判断に歯止めをかける仕組みになっているというアメリカ政治の基本中の基本もよく分かっているだろう。

今年の共和党予備選の投票者の数は急増しており、トランプ氏が

明らかに白人ブルーカラーという新しい層を共和党に引き込んでいる。過去に選挙にあまり行かなかった層が「おらがトランプ」支持のために一気になだれ込んでいった。予備選段階の投票率は、10〜30％程度と実際は高くないため、トランプ氏が必然的に勝ち上がりつついく。これがトランプ現象の構造である。

「怒り」を行動原理とする ティーパーティー運動との親和性

ところで、トランプ氏の支持者と話しながら、筆者は「どこかでこんな集団にあったことがある気がする」という奇妙な感覚に襲われた。

それは、数年前にティーパーティー運動を調査した際の運動の参加者との会話だった。ティーパーティー運動が全米的に認知されるようになった契機は、それまで別個で活動していた様々なティーパーティーの運動団体が2009年9月12日にワシントンに結集した「納税者ワシントン行進」（別名「9・12プロジェクト」）である。筆者は現地での行進に参加する人々に話を聞いた。その際、非常に印象深かったのは、全米から集まっているのにかかわらず、参加者が極めて同質的だったことである。参加者のほぼすべてが白人で、会話をしても知的とは到底言えず、明らかにブルーカラー層が中心だった。「オバマケア（医療保険改革）は



2016年4月15日、ニューヨーク州プラッツバーグの選挙集会で演説するトランプ氏

俺たちの税金を盗み、アフリカ系や移民してきたばかりのやつらを富ませる」「オバマは共産主義者だ」などと、参加者は口をそろえてオバマ政権批判を繰り返した。

オバマ大統領の写真にちよび髭を描き、ヒトラーに見立てた看板も複数、目にした。参加者を見ると、自分の生活や将来への不安をオバマ批判に置き換えているようだった。参加者が白人であり、アフリカ系であるオバマをなじることで、自分たちの中の抑圧された人種差別的な意識を吐き出しているような参加者も少なくないように見えた。

トランプ氏の支持層とティーパーティー運動参加者とは先が見えない不安感にさいなまれた怒りという強い共通項がある。

ティーパーティー運動は一般的には「小さな政府」を希求する財政保守運動の総称である。2016年選挙では、トランプ氏ではなく、そのライバルで、財政保守的なテッド・クルーズ上院議員を支持しているティーパーティー運動参加者も数多い。ただ、もともと自然発生的な運動だったこともあり、この運動は一枚岩ではない。筆者が聞き取りをした中でもトランプ氏の支持層にもティーパーティー運動参加者が何人もいた。あくまでも筆者の調査の範囲だが、両者の親和性は実際に高かったように感じた。

ブルーカラー層の「怒り」を行動原理とするティーパー

ティ運動に対して、共和党はここ数年、その動きを看過するだけでなく、党の支持層として大切に育てていった。その帰結として、トランプ現象が生まれたのではないだろうか。大切に育てた層がトランプ支持になり、そのトランプ氏が共和党の指導部から徹底的に嫌われているという現状を見ると、何とも皮肉である。

メディアが生み出したモンスター

トランプ氏が白人ブルーカー層をとらえたのは、トランプ氏がメディアの使い方を知っていることも大きい。トランプ氏はメディアが生み出したモンスターでもある。

トランプ氏は1988年から大統領選に色気を見せ、これまで何度も立候補の意欲を示してきたが、実際に立候補したのは今回が初めてだ。ビジネススマンでもあるトランプ氏は、離婚や倒産を経験し、金持ちのプレイボーイという時代の寵児ちやうじのような扱いで、常にテレビの注目を集めてきた。テレビの有名人である。特に過去10年ほどは、「リアリティショー」のホストとして出演し、自分がどのように見えるのか、人々にどのようにしたら訴えかけることができるのか、約30年の経験を基に自己PRの術を学んできた。「リアリティショー」とは台本がなく、現実が起こっている状況でどのように出演者が行動するかを楽しむテレビの人間ドキュメント番組である。「リアリティショー」

は日本ではいい例があまりないが、あえて言えばかつての「進め！電波少年」などに近いかもしれない。

メディアにとっては、今回の大統領選におけるトランプ氏の存在そのものが、「リアリティショー」である。トランプ氏主演のこの「ショー」はさしずめ「テレビの有名人が大統領になるまで」といったタイトルがぴったりかもしれない。トランプ氏に対して、テレビだけでなく、新聞、雑誌などのメディアも人気歌手のジャスティン・ビーバーなどと同じように面白おかしくトランプ氏を扱った。

テレビの方程式を知り尽くしているという意味で、トランプ氏は抜群に賢い男である。「リアリティショー」は予測不可能な行動ができればほど人気が高くなる。次から次へと予想もしない展開を生み出すために、トランプ氏自身の言動はどんどん過激になる。トランプ氏に引きずられるように「偽善者」「嘘つき」など相手をこき下ろす言葉が連日の選挙戦に登場し、その頻度は過去にないほどのひどいレベルで、メディアを埋め尽くしてきた。

トランプ氏はスピーチに様々な工夫をし、彼の支持層である白人ブルーカー層の心に響くように簡単な言葉を繰り返しながら、言いたいことのありのままのイメージを伝えるという手法をとった。トランプ氏のスピーチの言葉は非常に単純であり、「小学校6年レベル」などという研究者の分析結果もある。



トランプ支持者と重なる「白人ブルーカラー層」が多数参加したティーパーティー運動の「納税者ワシントン行進」(2009年9月12日。ワシントン市内にて筆者撮影)

言葉だけにとどまらない。相手候補や自分に否定的なジャーナリストたちを大きく体をゆすってなじるトランプ氏の下品な振る舞いに、識者の多くは眉をひそめたが、白人ブルーカラー層は「俺たちと一緒だ」と共感する。

毎回毎回、ハラハラさせる言動をトランプ氏が取り続けられ、どうしても見続けてしまう。トランプ氏が登場する共和党の討論会は、2015年8月6日の第1回目から、毎回、記録的な数の視聴者数を生み、広告収入は上がっていく。討論会が終われば24時間ニュース専門局はトランプ氏の様子を何度も何度も繰り返し放映する。こうしてトランプ氏を取り上げれば、メディアも儲かるという構造が成り立っていく。

「俺の知っているトランプではない」というトランプ氏の昔からの知人の証言が時々登場しているように、トランプ氏は大統領選という「リアリテイショー」の中で、望まれる自己像を演じていく。自分がお金になる売れる候補であることをトランプ氏は熟知している。過激になる分、この「リアリテイショー」は回を重ねるごとに、抜群に面白くなるのは当たり前だ。こうして、視る人たちの心をわしづかみにしていく。

アウトサイダーが勝てる「メディア仕掛けの選挙」

ところで、そもそもなぜトランプ氏のような全くのアウト

トサイダーが立候補し、善戦できる仕組みになっているのかを少し説明しておきたい。かつての立候補者は政党幹部の息がかかった人物がリクルートされ、候補者を選出する方法も党の顔役の意見が重要となる党員集会がほとんどだった。1960年代後半、大統領選挙の予備選挙段階での「選挙過程の透明化・民主化」を目的とした代議員改革が、まず民主党で本格検討された。これを検討したマクガバン・フレージャー委員会 (McGovern-Fraser Commission) の勧告に従って、各州の民主党支部は1970年代から党員集会に代わって幅広い有権者が投票することができるよう予備選挙を本格的に導入することになった。その後、共和党でも同様の改革が行なわれた。

予備選挙段階の「透明化・民主化」から40年以上たち、この制度は完全に定着し、今回のトランプ氏のようなアウトサイダーも自由に出馬できるようになったほか、有権者も自由に投票できるようになった。一方、一般の有権者が投票する際に最も参考にするのが候補者の動向を伝えるメディアの報道である。特定の候補に対する報道の内容や、報道の量そのものの多寡が有権者を動かす、候補者選びに大きな影響力を持つことになった。このようにして、メディアの選挙過程で影響力が飛躍的に大きくなり、メディアが政党に代わってキングメーカーの役割を実質的に行なうようになった。トランプ氏のようなアウトサイダーが善戦で

きる「メディア仕掛けの選挙」が制度化されていった。

「リアリティショー」の行方

この「リアリティショー」の結論そのものも、過去のアメリカの歴史にないような極めてドラマチックなものになるかもしれない。現在、代議員獲得数1位のトランプ氏が今後の選挙戦で6割の代議員を取得できなければ、共和党の大統領候補を決める全国党大会まで過半数に届かない可能性が高くなっているという見方があるためだ。もし、代議員数の過半数を獲得できなかった場合には、「ブローカー・コンベンション（あるいはコンテステッド・コンベンション）」となる。各州での「党員集会」「予備選」の結果の拘束がなくなり、決選投票では自由に支持候補を決める権限が代議員に与えられる。もし、共和党候補として他の人物が擁立された場合、トランプ氏は怒り狂い、支持者を党大会から連れだすかもしれない。

これだけで十分すぎる「ショー」の結末だ。しかし、「ショー」には続編があるかもしれない。トランプ氏はこれだけで終わらず、無党派候補として選挙戦に残る可能性もある。そうなると本選挙は、民主党候補、共和党候補、トランプ氏の三つ巴となり、538人の選挙人投票で過半数の270を取った候補がいらないという19世紀初めに1度だけしかない例外中の例外となるようなドラマが生まれる

かもしれない。もし、選挙人の過半数を取った候補がいな
い場合には下院が大統領を選出し、上院が副大統領を選出
する。現在は上下両院ともに多数派は共和党であり、今年
秋の選挙でもおそらく下院は共和党が死守する可能性があ
る。そうすると、さすがにトランプ大統領は生まれない。
それでも徹底的に楽しませたという意味で、「リアリテイ
ショー」は素晴らしい大団円となるだろう。

おわりに

扇動的な政治とどうつきあうかは、民主主義の永遠の
テーマである。トランプ氏は自ら主演する大統領選挙とい
う「リアリテイショー」の中で白人ブルーカラー層を目標
めさせていった。しかし、この層は、所得水準も教育水準
も低く、ポピュリズムになびきやすいのは悲しい現実でも
ある。いづれにしろ、トランプ氏の「リアリテイショー」
の結論がどうなるのか、とても興味深い。